

シリーズ1 地域の達人 -足立冽氏-

丹波恐竜化石の第一発見者に聞く。

僕には岩は動いているようにみえるんです。大地も長い年月をかけて動いてきたから今の状態になっている。そういう想いにふけることが好きなんですね。そういうのを勝手に“ロマンチック地学”なんて呼んだりしてるんですけどね（笑）。



足立冽
kiyoshi adachi

丹波市在住。過去には、篠山層群でのサンドパイプの化石を初めて発見した経験を持つ。現在は、柏原高等学校の英語の非常勤講師。



今日は、「丹波竜」の第一発見者のお一人でいらっしゃる足立冽先生にお話を伺いたいと思います。まずはやはり、発見時の様子からお聞かせください。

「はい。僕は34歳の時に県立高校の英語教師になって、6年間都会の高校に勤務した後、昭和58年に篠山市内の高校に転勤になりました。その高校では1年生の恒例行事で“地理地学実習”というのがあって、生徒達と一緒に野山や川を観察する授業があったんです。で、川原を観察していた時に不思議なものを見つけました。サンドパイプという、貝などの小動物が水底の泥の中につくった住み穴が化石にならなかったものなんですけど、篠山層群では初めて発見されたということで、新聞でも取り上げられたほどでした。そんなことがあってから、地学に興味を覚えるようになりました。」

「翌日の夜に自宅で骨のクリーニングをしました。母岩を剥ぐと、なんと骨の側面に条線が現れたんですね。断面の組織と条線から恐竜の骨かも知れない。さらにインターネットで調べて、恐竜以外に考えられないという結論に至りました。」

「これまで篠山鳳鳴高校と柏原高校の生徒達に“山南町の篠山川には恐竜の化石が見つかるかもしないぞ。一緒に探さないかい？”などと説いてみたり、“私の一生の夢は丹波の地で恐竜の化石を発見すること”と退職の時もスピーチの中で話したりしてきましたが、なんとその夢が現実になってしまい、それこそ夢じゃないかと思っています。」

「そして次の日に博物館に持って来られたんですね。ひとはくに持つていこうと思われたきっかけは？」

「化石を発見した時はひとはくしかないといました。近くに発電所があるので杭のようなものが埋まっている可能性はあると思ったんです。何かよく判らないが慎重に掘り出そうということで、10cm余り掘ったところでの物体がぬけました。中で折れてたようで、その断面を見ると粟粒のようなものがわずかに見えました。骨だった、と思いましたね。ただ、その時はさすがに恐竜の骨だとは思わず、ワニくらいだろと思いました。」「その日は手が腫れ、炎天下の中での作業だったので、疲れて帰ることにしました。帰りの車の中でも、何度も停車して

助手席の化石を観察しました。白亜紀の陸に棲む牛や馬くらいの大きさの動物といえばなんだろ、ワニはこんな真っ直ぐ長い骨を持っていたのだろうか、骨の大きさからすると相当大きな動物だ。ほんといろいろ考えましたね。なかなか家に着かなかったです（笑）。それに、その夜は現場の化石が脳裏を離れず、ほとんど眠れませんでした。」

「翌日の夜に自宅で骨のクリーニングをしました。母岩を剥ぐと、なんと骨の側面に条線が現れたんですね。断面の組織と条線から恐竜の骨かも知れない。さらにインターネットで調べて、恐竜以外に考えられないという結論に至りました。」

「これまで篠山鳳鳴高校と柏原高校の生徒達に“山南町の篠山川には恐竜の化石が見つかるかもしないぞ。一緒に探さないかい？”などと説いてみたり、“私の一生の夢は丹波の地で恐竜の化石を発見すること”と退職の時もスピーチの中で話したりしてきましたが、なんとその夢が現実になってしまい、それこそ夢じゃないかと思っています。」

「そして次の日に博物館に持って来られたんですね。ひとはくに持つていこうと思われたきっかけは？」

「化石を発見した時はひとはくしかないといました。僕が恩師として尊敬している石川龍彦先生っていう化石の先生がいらっしゃるんですけど、その先生の後輩の方がひとはくの設立時に関わられたことを記憶していて、ひとはくに持つてきました。僕は三枝先生がその人だと思っていました。骨だった、と思いましたね。ただ、その時はさすがに恐竜の骨だとは思わず、ワニくらいだろと思いました。」「その日は手が腫れ、炎天下の中での作業だったので、疲れて帰ることにしました。帰りの車の中でも、何度も停車して



写真上／化石発見者の村上茂さん（左）と足立冽さん（右） 写真右／発見直後の化石（村上茂氏撮影・提供） 写真左／発見当日に化石を発掘する足立さん（村上茂氏撮影・提供）

足立冽さんの1日

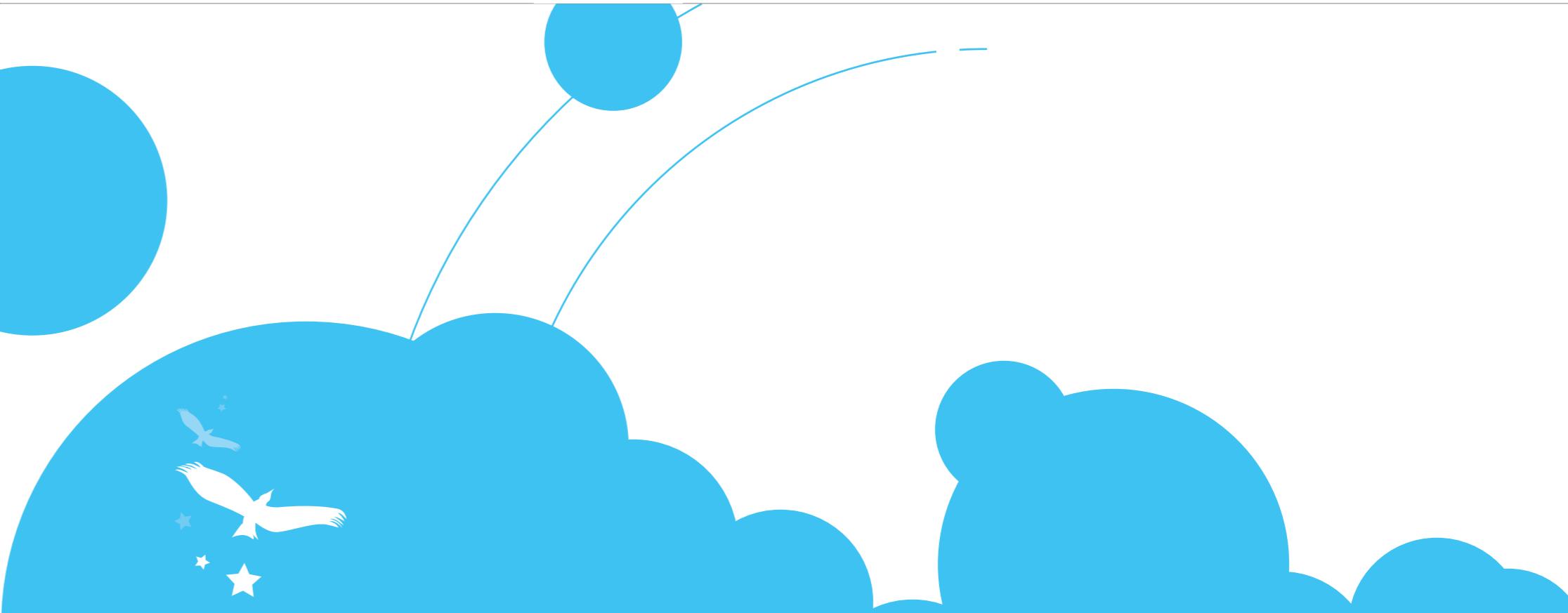
6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	1
睡眠	起床 朝食	柏原高校で非常勤講師として授業 (英語が専門です)	自宅で 昼食	畑で農作業	お茶の 時間	読書や書き物	自宅で 夕食	自宅で 英語の塾	地学関係の勉強や読書 英語の教材づくりや復習	睡眠									

■時々気が向いた時にすること
柏原町内の観光室内・清掃・会合など（月に1～2度「柏原ふるさとボランティアガイド」所属）

・3月頃からは化石発見の講演（月に3～4回）、地層観察（月に2回くらい）や自宅で岩石・化石の観察、自宅の庭で kutotrenning（野山を歩くために、週に2～3度）

長年の経験が身にしきりたりです。

最近は化石発見の手記や講演の資料づくりなどがあります。



—恐竜の化石だと研究員に断言された時はどう思われましたか？

「恐竜の化石だとと思うのですが見て頂けないですか？と三枝先生にお話したんですけど、はじめ先生は腕組みをしましたね（笑）。化石を包んでいる新聞紙もとってもえませんでした（笑）。仕方がないから私の方で新聞紙をとると、両手に化石を持たれてしげしげと見た後、こう呼ばれたんです。“これ本物ですよ！本物ですよ！どこで見つけたんですか！鳥肌が立ちます！”すぐ現地に連れて行ってください！」

「さすがだとありました。私が2日かかるで、やっとこれは恐竜の化石ではないかと結論を出したのに、先生は数秒でそれだと確定されたのですから。ただ正直なところ、僕自身は発見した時から感動という気持ちにはなかったですね。ひとはくに来て、三枝先生に恐竜の化石だと指摘されて“やれやれ、やっともやもやが晴れた”といった感じでした。」

「僕自身、何かを突き止めたい、という気持ちよりも、その中にひたることの方が快感で、今回の発見でもそうですが、恐竜の化石の真上の地層に小さな中のにはった跡があったんですが、それは学者も大衆も見向きもせず、みんな恐竜のほうに向かっているんですね。小さな虫が一瞬だけそこに生えた証を、一億数千万年もの時の流れの中に遺したかと思うと、何となく愛おしくなります。自然景観の美しさもそうですね。僕には岩は動いているようにみえるんです。大地も長

い年月をかけて動いてきたから今の状態になっている。そういう想いにふけることが好きなんですね。そういうのを勝手に“ロマンチック地学”なんて呼んだりしてますけどね（笑）。」

一生徒さん達からの反応は？

「“先生、ほんまに恐竜いたんですね！” “あの話、うそだと思ってました。ほんまやったんですね”という言葉をいただきました（笑）。あと、ある学生からは、お祝いに“ヘルメット”と“ヘッドライト”をプレゼントして頂きました。発掘をするとヘッドライトといいます（笑）。」

「さすがだとありました。私が2日かかるで、やっとこれは恐竜の化石ではないかと結論を出したのに、先生は数秒でそれだと確定されたのですから。ただ正直なところ、僕自身は発見した時から感動という気持ちにはなかったですね。ひとはくに来て、三枝先生に恐竜の化石だと指摘されて“やれやれ、やっともやもやが晴れた”といった感じでした。」

「ちなみに発見してからしばらくの間は黙ってないといけなくて、嫁さんにも話ができませんでした。発見の翌日、庭で化石を眺めていたら、僕の後ろを通り過ぎた嫁さんが“それ、スペアリブみたいね”っていうんです（笑）。何を言ってるんだ！恐竜の化石なんだぞ！って言いつたかったんですけどね。それ以降、嫁さんに捨てられたら困るから自分の部屋の中に隠していました（笑）。」

—発掘でよかったことは？

「もともと僕は、岡山の美作市（みまさし）生まれでして、そこは古墳や遺跡がたくさんあるところなんですよ。その

中でも“月の輪古墳”は、戦後はじめて学者と住民が一体となって発掘調査に取り組んだことで有名で、僕は当時子どもだったんですけど、岡山大学の考古学の先生の後をずっとついていました。嬉しくてまたまなかったんですね。50年たって、あの時は見学をしていただけでしたけど、今回は恐竜というカタチで発掘調査に参加でき、民間と学者との公的機関が一体となって取り組めたことが、本当に嬉しく思っています。」

—最後に読者の方々にメッセージをお願いします。

「僕が中学の時、例えば数学の先生が酒のおいしさについて話をしてくれたりとか、とにかくいろんな話をしてくれました。僕自身も英語の教師をしておりますが、考古学の話をしたり、化石や地層の話をしたりします。特に学生諸君に申し上げたいのは、とにかくいろんな分野に幅を広げて取り組んでほしい、ということです。」

「それと、子どもたちにもっと外で遊んでほしいと思います。丹波の美しさは自然の地形だと思います。篠山川の美しさは絶品ですね！そういう優しいものが丹波にはたくさんあるので、そういう環境の中で遊びながら自然科学に興味を持ってほしいと思います。」

—本日は大変貴重なお話をありがとうございました。



企画展 7/7(土)～9/24(月祝)

「瀬戸内海のいまとむかし」



2001年5月31日、大阪湾に迷い込んだナガスクジラがシラス漁をしていた漁船の網にかかりました。息絶えたクジラは淡路島の漁港で陸揚げ、解体されました。これは当時マスコミの話題になり、「クジラは人と自然の博物館が引きとり、骨格標本にする」と報じられました。あれから6年、クジラの頭部の骨格標本が今回の企画展で公開されます。クジラは、同じ時期に淡路島沖で捕獲されたアオザメの標本とともに、豊かな海のシンボルとして展示の目玉となります。（佐藤裕司：自然環境評価研究部）

捕獲されたアオザメ。
2001年6月5日、クジラと同様、塩田漁港に陸揚げされました。体長約3メートル。



掘り出されたクジラ頭部の骨格。
解体したクジラの骨を土に埋めて待つこと二年、バクテリアの働きで肉が完全に分解されました。



ナウマンゾウの白歯。
約二万年前、陸だった瀬戸内海はゾウの楽園でした。

